

小倉百人一首

〔小倉百人一首〕(本文参照)を、初句の五十音順に配列した。白抜き数字は配列順を、その下の数字は歌番号を示す。下の句からも検索できるよ、下段にその索引を掲載した。

- 1 秋風にたなびく雲の絶え間より もれ出づる月の影のさやけさ
- 2 秋の田のかりほの庵の苦をあらみ 我が衣手は露にぬれつつ
- 3 明けぬれば暮るるものとは知りながら なほ恨めしき朝ほらけかな
- 4 あさぢふの小野の篠原のぶれど あまりてなどか人の恋しき
- 5 朝ほらけ有明のけの月と見るまでに 吉野の里に降れる白雪
- 6 朝ほらけ宇治の川霧はたえたえに あらはれわたる瀬々木川の網代木
- 7 あしびきの山鳥の尾のしだり尾の なながし夜をひとりかも寝む
- 8 淡路島のかよふ千鳥の鳴く声に 幾夜もねざめぬ須磨の関守
- 9 あはれともいふべき人はおもほえて 身のいたづらになりぬべきかな
- 10 逢ふ見ての後の心にくらぶれば 昔は物を思はざりけり
- 11 逢ふことの絶えてしなはなかなかに 人ををも身を恨みざらまし
- 12 天つ風雲のかよひ路吹きとぢよをとめの姿しはしとどめむ
- 13 天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出いでし月かも
- 14 あらざらむこの世のほかの思ひ出に いまひとたびの逢ふこともがな
- 15 あらし吹く三室の山のみち葉は たつたの川の錦となりけり
- 16 有明けのつれなく見えし別れより あかつきば愛さきものはなし
- 17 有馬山猪名の笹原の風吹けば いでそよ人を忘れやはする
- 18 いにしへの奈良の都の八重桜の けふ九重のにはほひぬるかな
- 19 今来むと言ひしばかりに九月の 有明けの月を待ち出いでつるかな
- 20 今はただ思ひ絶えなむとばかりを 人つてならでいふよしもがな
- 21 うかりける人を初瀬の山おろしよ はげしかれとは折らぬものを
- 22 恨みわび干さぬ袖でだにあるものを 恋に朽ちなむ名こそ惜しけれ

- 〔新古今〕秋上・四三・藤原頭輔
- 〔後撰〕秋中・三〇・天智天皇
- 〔後拾遺〕恋・六三・藤原道信
- 〔後撰〕恋・五七・源等
- 〔古今〕冬・三三・坂上是則
- 〔千載〕冬・四〇・藤原定頼
- 〔拾遺〕恋・七六・柿本人麻呂
- 〔金葉〕冬・三七・源兼昌
- 〔拾遺〕恋・五〇・藤原伊尹
- 〔拾遺〕恋・七〇・藤原敦忠
- 〔拾遺〕恋・七六・藤原朝忠
- 〔古今〕雑上・八三・良岑宗貞
- 〔古今〕騷旅・四六・安倍仲麻呂
- 〔後拾遺〕恋・七三・和泉式部
- 〔後拾遺〕秋下・三六・能因法師
- 〔古今〕恋・三五・壬生忠岑
- 〔後拾遺〕恋・七九・大式三位
- 〔後拾遺〕恋・二九・伊勢大輔
- 〔詞花〕春・三九・伊勢大輔
- 〔古今〕恋・六一・素性法師
- 〔後拾遺〕恋・七五・藤原道雅
- 〔千載〕恋・七八・源俊賴
- 〔後拾遺〕恋・八五・相模

下の句から上の句を引く索引

- 16 ↑ あかつきばかり愛さきものはなし
- 87 ↑ 葦のまろ屋に秋風ぞ吹く
- 64 ↑ 逢はてはでこのよを過くしてよとや
- 52 ↑ あはれ今年の秋もいぬめり
- 89 ↑ あまの小舟の綱手かなしも
- 4 ↑ あまりてなどか人の恋しき
- 6 ↑ あらはれわたる瀬々木の網代木
- 19 ↑ 有明けの月を待ち出いでつるかな
- 59 ↑ いかにかに久しきものとは知る
- 8 ↑ 幾夜もねざめぬ須磨の関守
- 41 ↑ いづくも同じ秋の夕暮れ
- 75 ↑ 見つ見きとてか恋しからむ
- 17 ↑ いでそよ人を忘れやはする
- 14 ↑ いまひとたびの逢ふこともがな
- 100 ↑ 今ひとたびのみゆき待たなむ
- 27 ↑ 憂うきにたへぬは涙なりけり
- 58 ↑ 憂うしと見し世ぞ今は恋しき
- 35 ↑ おきまどはせる白菊の花
- 24 ↑ かけじや袖の濡れもこそすれ
- 60 ↑ かこ顔なるわが涙かな
- 83 ↑ 傾きくまでの月を見しかな
- 68 ↑ かひなく立たむ名こそ惜しけれ

23 奥山にもみぢ踏み分け鳴く鹿の 声聞く時ぞ秋はかなしき
〔古今・秋上・三五・猿丸大夫〕

24 音に聞く高師たかの浜のあだ波は かけしや袖そでの濡れもこそすれ
〔金葉・恋下・四六・紀伊〕

25 大江山おほえいく野の道の遠ければ まだふみも見ず天あまの橋立はしだて
〔金葉・雑上・吾吾・小式部内侍〕

26 おほけなくき世の民におほふかな わが立つ袖そでに墨染すみぞめの袖そで
〔千載・雑中・二毛・慈円〕

27 思ひわびびても生命いのちいちはあるものを 憂うれきにたへぬは涙なりけり
〔千載・恋三・八八・道因法師〕

28 かくとだにえやはいぶきのさしも草 さしも知らじな燃ゆる思ひを
〔後拾遺・恋一・六三・藤原実方〕

29 かささぎの渡せる橋に置く霜の 白きをみれば夜ぞ更けにける
〔新古今・今冬・六〇・大伴家持〕

30 風そよぐならの小川おとがの夕暮れは みそぎぞ夏のしるしなりける
〔新勅撰・夏・二〇・藤原家隆〕

31 風をいたみ岩うつ浪のおれののみ くだけて物を思ふころかな
〔詞花・恋上・二二・源重之〕

32 君がため春の野に出でて若菜つむ わが衣手ころもに雪は降りつつ
〔古今・春上・三二・光孝天皇〕

33 君がため惜しからざりし命さへ 長くもがなと思ひけるかな
〔後拾遺・恋一・六九・藤原義孝〕

34 さりぎりす鳴くや霜夜のさむしろに 衣ころもかたしきひとりかも寝む
〔新古今・秋下・五八・藤原良経〕

35 心あてに折らばや折らむ初霜はつしものおきまどはせる白菊はくきくの花
〔古今・秋下・二七・凡河内躬恒〕

36 心にもあらで憂うれき世にながらへば 恋しかるべき夜半よるなの月かな
〔後拾遺・雑一・六〇・三条院〕

37 来きぬ人をまつほの浦の夕なぎに 焼くや藻塩そうしほの身もがれつつ
〔新勅撰・恋三・八九・藤原定家〕

38 このたびは幣はも取りあへず手向山てむかやまに 紅葉もみぢのにしき神のまにまに
〔古今・羈旅・四〇・菅原道真〕

39 恋すつわが名はまだき立ちにけり 人知れずこそ思ひそめしか
〔拾遺・恋一・三一・壬生忠見〕

40 これやこの行くも帰るも別れては 知るも知らぬも逢坂あさかの関
〔後撰・雑一・〇八・嵯丸〕

41 さびしさに宿しゆくを立ち出いでてながむれば いづも同じ秋の夕暮れ
〔後拾遺・秋上・三三・良暹法師〕

42 しのおれど色にいでにけりわが恋は ものや思ふと人のとふまで
〔拾遺・恋一・三三・平兼盛〕

43 白露しらつゆに風の吹きしく秋の野は つらぬきとめぬ玉ぞ散りける
〔後撰・秋中・三〇・文屋朝康〕

44 住江すゑの岸に寄る波よるさへや 夢の通とほひ路ぢ人目ひとめよくらむ
〔古今・恋一・五九・藤原敏行〕

45 瀬を早み岩にせかる滝川たきがわの われても末すえに逢あはむとぞ思ふ
〔詞花・恋上・三三・崇徳院〕

46 高砂たかさごの尾の上うへの桜咲きにけり 外山とほやまの霞かすみ立たすもあらなむ
〔後拾遺・春上・三〇・大江匡房〕

47 滝の音はたえて久しくなりぬれど 名こそ流れてなほ聞こえけれ
〔拾遺・雑上・四四・藤原公任〕

48 田子の浦にうち出いでて見れば白妙しろたへの 富士の高嶺たかねに雪は降りつつ
〔新古今・今冬・六五・山部赤人〕

54 ↑ からくれなるに水くくるとは 霧立ちのぼる秋の夕暮れ

79 ↑ 霧立ちのぼる秋の夕暮れ

31 ↑ くだけて物を思ふころかな

80 ↑ 雲がぐれにし夜半よるなの月かな

61 ↑ 雲のいづこに月宿らむ

97 ↑ 雲居くもゐにまがふ沖つ白波しらなみ

18 ↑ けふ九重ここのへのににほひぬるかな

96 ↑ 今日を限りの命ともがな

36 ↑ 恋しかるべき夜半よるなの月かな

56 ↑ 恋ぞつもりて淵ふちとなりぬる

22 ↑ 恋に朽ちなむ名こそ惜しけれ

34 ↑ 衣ころもかたしきひとりかも寝む

67 ↑ 衣ころもはすてふ天あまの香具山かぐやく

23 ↑ 声聞く時ぞ秋はかなしき

28 ↑ さしも知らじな燃ゆる思ひを

69 ↑ しづなく花の散るらむ

50 ↑ 忍しのぶることの弱りもぞする

40 ↑ 知るも知らぬも逢坂あさかの関

29 ↑ 白きをみれば夜ぞ更けにける

53 ↑ 末の松山波越なみさじとは

73 ↑ ただ有明ありあけの月ぞこのれる

15 ↑ たつたの川の錦にしほなりけり

43 ↑ つらぬきとめぬ玉ぞ散りける

46 ↑ 外山とほやまの霞かすみ立たすもあらなむ

33 ↑ 長くもがなと思ひけるかな

7 ↑ ながながし夜よをひとりかも寝む

49 16 立ち別れいなばの山の峰に生おふる まつとし聞かば今帰り来こむ

50 89 玉の緒を絶えなば絶えねながらへば 忍おぶることの弱りもぞする

51 34 誰をかも知る人にせむ高砂の 松も昔の友ならなくに

52 75 契りおきしさせもが露を命にて あはれ今年の秋もいぬめり

53 42 契りきなかたみに袖をしほりつつ 末の松山波越さじとは

54 17 ちはやぶる神代もきかず竜田川からくればなみに水くるとは

55 23 月みればちちに物こそかなしけれ わが身ひとつの秋にはあらねど

56 13 つくばねの峰より落つるみな川 恋ぞつもりて淵となりぬる

57 80 ながらむ心も知らず黒髪の一乱れて今朝は物をこそ思へ

58 84 ながらへばまたこの頃やしはばれむ 憂しと見し世ぞ今は恋しき

59 53 嘆きつつひとり寝る夜の明くる間は いかにか久しきものとかは知る

60 86 なげけとて月やは物を思はする かこち顔なるわが涙かな

61 36 夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを 雲のいつこに月宿らむ

62 25 名にしおはば逢坂山のさねかづら 人に知られでくるよしもがな

63 88 難波江の葦のかりねのひとよゆえ みをたくしてや恋ひわたるべき

64 19 難波湯のみじかき葦のふしの間も 逢あはでこのよを過ぐしてよとや

65 96 花誘ふ風あらしの庭の雪ならで ぶりゆくものはわが身なりけり

66 9 花の色は移りにけりないたづらに 我が身世にふるながめせしまに

67 2 春過ぎて夏来にけらし白妙の衣もほすてふ天の香具山

68 67 春の夜の夢ばかりなる手枕ならに かひなく立たむ名こそ惜しけれ

69 33 ひさかたの光のどけき春の日に しづ心なく花の散るらむ

70 35 人はいさ心も知らずふるさとに 花ぞ昔の香かにはひける

71 99 人もをし人もうらめしあぢきなく 世を思ふゆゑに物思ふ身は

72 22 吹くからに秋の草木のしをるれば むべ山風をあらしと言ふらむ

73 81 ほととぎす鳴きつる方をながむれば ただ有明けの月ぞのこる

74 49 御垣守り衛士のたく火の夜は燃え 昼は消えつつものをこそ思へ

《古今・離別三空・在原行平》

《新古今恋・〇四・式子内親王》

《古今・雑上・九〇・藤原興風》

《千載・雑上・〇六・藤原基俊》

《後拾遺・恋四・七〇・清原元輔》

《古今・秋下・二五・在原業平》

《古今・秋上・二五・大江千里》

《後撰・恋三・七六・陽成院》

《千載・恋三・〇三・待賢門院堀河》

《新古今・雑下・八四・藤原清輔》

《拾遺・恋四・二二・藤原道綱母》

《千載・恋三・二九・西行》

《古今・夏・二六・清原深養父》

《後撰・恋三・七〇・藤原定方》

《千載・恋三・八七・皇嘉門院別当》

《新古今・恋二・〇四九・伊勢》

《新勅撰・雜・〇五二・藤原公経》

《古今・春下・二三・小野小町》

《新古今・夏・二五・持統天皇》

《千載・雑上・九六・周防内侍》

《古今・春下・八四・紀友則》

《古今・春上・四三・紀貫之》

《続後撰・雜中・二三・後鳥羽院》

《古今・秋下・四九・文屋康秀》

《千載・夏・二六・藤原実定》

《詞花・恋上・三五・大中臣能宣》

85 ↑流されもあへぬもみぢなりけり

47 ↑名こそ流れてなほ聞こえけれ

81 ↑なほあまりある昔なりけり

3 ↑なほ恨めしき朝ばらけかな

76 ↑ぬれにぞぬれし色は変はらず

91 ↑聞のひまさへつれなかりけり

21 ↑はげしかれとは祈ひらぬものを

70 ↑花ぞ昔の香かにはひける

82 ↑花よりほかに知る人もなし

94 ↑人こそ知らね乾かく間もなし

84 ↑人こそ見えね秋は来よにけり

39 ↑人知れずこそ思ひそめしか

20 ↑人づてならでいふよしもがな

62 ↑人に知られでくるよしもがな

98 ↑人には告げよ海人の釣舟

95 ↑人の命の惜しくもあるかな

86 ↑人目も草もかれぬと思へば

11 ↑人をも身をも恨みざらまし

74 ↑昼は消えつづものをこそ思へ

48 ↑富士の高嶺に雪は降りつつ

65 ↑ふりゆくものはわが身なりけり

78 ↑ふるさと寒く衣ももうつなり

25 ↑まだふみも見ず天の橋立

49 ↑まつとし聞かば今帰り来こむ

13 ↑三笠の山にいでし月かも

- 75 27 みかの原わきて流るるいづみ川 見つ見きとてか恋しかるらむ
〔新古今〕恋一・九矣・藤原兼輔
- 76 90 見せばやな雄鳥の海人 袖さだにもぬれにぞぬれし色は変はず
〔千載〕恋四・六六・殷富門院大輔
- 77 14 みちのくのしのぶもぢずり誰たれゆゑに 乱れそめにし我れならなくに
〔古今〕恋四・七四・源融
- 78 94 み吉野の山の秋風さ夜ふけて ふるさと寒く衣うつつなり
〔新古今〕秋下・四三・藤原雅経
- 79 87 村雨露の露もまだひぬまきの葉に 霧立ちのぼる秋の夕暮れ
〔新古今〕雑上・四九・紫式部
- 80 57 めぐりあひて見しやそれとも分かぬまに 雲がくれにに夜半の月かな
〔新古今〕雑上・四九・紫式部
- 81 100 ももしきや古き軒端のしのぶにも なほあまりある昔なりけり
〔続後撰〕雑下・三〇五・順徳院
- 82 66 もろともにあはれと思へ山桜 花よりほかに知る人もなし
〔金葉〕雑上・五三・行尊
- 83 59 やすらはて寝なましものを小夜ふけて 傾かたふくまでの月を見しかな
〔後拾遺〕恋二・六〇・赤染衛門
- 84 47 八重葎に茂れる宿のさびしきに 人こそ見えぬ秋は来きにけり
〔拾遺〕秋二・四〇・惠法師
- 85 32 山川に風のかけたる柵は 流るれもあへぬもみぢなりけり
〔古今〕秋下・三三・春道列樹
- 86 28 山里は冬ぞさびしさまさりける 人目も草もかれぬと思へば
〔古今〕冬・三五・源宗子
- 87 71 夕されば門田の稲葉おとづれて 葦のまろ屋に秋風ぞ吹く
〔金葉〕秋二・三三・源経信
- 88 46 由良のとをわたる舟人かちを絶たえ 行方も知らぬ恋の道かな
〔新古今〕恋二・〇七・曾禰好忠
- 89 93 世の中は常にもがもな渚こく あまの小舟の綱手かなしも
〔新勅撰〕羈旅・五三・源実朝
- 90 83 世の中よ道こそなれ思ひ入る 山の奥にも鹿しぞ鳴くなる
〔千載〕雑中・二二・藤原俊成
- 91 85 夜もすがらもの思ふころは明けやうで 聞のひまさへつれなかりけり
〔千載〕恋一・六六・俊忠法師
- 92 62 夜をこめて鳥のそら音ははかるとも よに逢坂の関は許さじ
〔後拾遺〕雑一・九矣・清少納言
- 93 8 わが庵はは都のたつみしかぞすむ 世をうち山と人はいふなり
〔古今〕雑下・九矣・喜撰法師
- 94 92 わが袖は潮干に見えぬ沖の石の 人こそ知らね乾かく間もなし
〔千載〕恋二・夫の二・条院讚岐
- 95 38 忘らるる身をば思はず誓ひてし 人の命の惜しくもあるかな
〔拾遺〕恋四・七〇・右近
- 96 54 忘れの行く末すまでは難ければ 今日を限りの命ともがな
〔新古今〕恋三・四九・儀同三司母
- 97 76 わたの原漕ぎいでて見ればひさかたの 雲居にまがふ沖つ白波釣糸
〔詞花〕雑下・三三・藤原忠通
- 98 11 わたの原八十島かけて漕ぎいでぬと 人には告げよ海人の釣舟
〔古今〕羈旅・四〇・小野篁
- 99 20 わびぬれば今はたおなじ難波なる みをつくしても逢はむとぞ思ふ
〔後撰〕恋五・六〇・元良親王
- 100 26 小倉山の峰のみぢ葉心あらば 今ひとたびのみゆき待たなむ
〔拾遺〕雑秋・二六・藤原忠平

- 30 ↑みそぎぞ夏のしるしなりける
- 77 ↑乱れそめにし我れならなくに
- 57 ↑乱れて今朝は物をこそ思へ
- 9 ↑身のをいたづらになりぬべきかな
- 99 ↑みをつくしても逢はむとぞ思ふ
- 63 ↑みをつくしてや恋ひわたるべき
- 10 ↑昔は物を思はざりけり
- 72 ↑むべ山風をあらしと言ふらむ
- 42 ↑ものや思ふと人のとふまで
- 38 ↑紅葉のにしき神のまにまに
- 1 ↑もれ出づる月の影のさやけさ
- 37 ↑焼くや藻塩の身もこがれつつ
- 90 ↑山の奥にも鹿しぞ鳴くなる
- 88 ↑行方へも知らぬ恋の道かな
- 44 ↑夢の通まひ路人目もよくらむ
- 5 ↑吉野の里に降れる白雪
- 92 ↑よに逢坂の関は許さじ
- 93 ↑世をうち山と人はいふなり
- 71 ↑世を思ふゆゑに物思ふ身は
- 32 ↑わが衣手に雪に降りつつ
- 2 ↑わが衣手に露にぬれつつ
- 26 ↑わが立つ袖に墨染めの袖ぞ
- 66 ↑わが身ひとつの秋にあらねど
- 45 ↑わかれても末まに逢はむとぞ思ふ
- 12 ↑ををとの姿しはしとどめむ